２０１７年（平成２９年）７月２６日　水曜日

デーリー東北新聞　１２面　掲載

第99回全国高校野球選手権

青森大会

〈第11日〉

青森山田VS光星 あす決勝 はるか夢球場 13：00 開始

第99回全国高校野球選手権青森大会第11日は25日、弘前市はるか夢球場で準決勝を実施した。八学光星は投打で弘学聖愛を圧倒し、コールド勝ち。工大一は青森山田の一発攻勢に泣き、競り負けた。

26日は休養日で試合がない。決勝は27日午後1時、同球場で試合開始。両校が夏の決勝で顔を合わせるのは90回大会以来9年ぶり。光星は2年連続9度目、青森山田は8年ぶり11度目の頂点を目指し、激突する。（取材班）

光星 試合運び盤石

準決勝

【弘学聖愛―八学光星】4回光星1死一塁、右翼席に2ランを放った小渕智輝弘が一塁を回ってガッツポーズ＝はるか夢

弘学聖愛0000100　1
八学光星120401×　8
（7回コールド）

（弘）須崎、平山、山口－工藤源
（八）福山、成田、福山、成田－瀬川

▽本塁打　鈴木（弘）小渕（八）
▽三塁打　小池（八）
▽二塁打　葛西健、田崎（弘）小池、小渕、近藤（八）
▽暴投　須崎（弘）
▽試合時間　2時間13分
（球審＝小松、塁審＝蛯名右、蛯名、古川幹）

【弘学聖愛】	打	安	点	振	球
⑧成中	3	0	0	1	1
④鈴木	3	2	1	1	0
③葛西健	4	2	0	0	0
⑦田所	4	2	0	0	0
⑤市川	2	0	0	1	2
②工藤源	4	0	0	2	0
⑥田崎	3	2	0	1	0
①須崎	0	0	0	0	0
1平山	2	0	0	0	0
1山口	0	0	0	0	1
⑨工藤晶	3	0	0	1	0

犠盗失併残
10001　28　8　1　7　4

【八学光星】	打	安	点	振	球
⑥吉田	3	1	0	1	1
③足立	4	1	0	1	0
4秋山	0	0	0	0	0
⑦小渕	4	3	4	0	0
⑧小池	4	2	1	1	0
⑤馬場	0	0	1	0	3
④3近藤	3	1	1	1	1
⑨田中	3	1	1	1	0
191成田	1	0	0	0	0
②瀬川	3	2	0	0	0
①919福山	2	0	0	1	0

犠盗失併残
22008　27　11　8　6　5

投手	回	打	安	振	球	失
須崎	1/3	4	3	1	0	1
平山	3	17	5	4	3	4
山口	2 2/3	13	3	1	2	3
福山	5 1/3	26	7	5	3	1
成田	2/3	2	0	1	0	0
福山	2/3	2	0	1	0	0
成田	1/3	3	1	0	1	0

【評】光星は初回1死二、三塁から小池の左中間二塁打で先制。二回に小渕の2点二塁打で加点すると、四回は小渕の2ランなどで4点を奪い、リードを広げた。先発福山は低めの変化球が決まった。聖愛は毎回走者を出しながら一本が出ず、流れを逃した。得点は五回に鈴木の中越え本塁打で挙げた1点にとどまった。

小渕 会心の一発 3安打 4打点

ハイライト

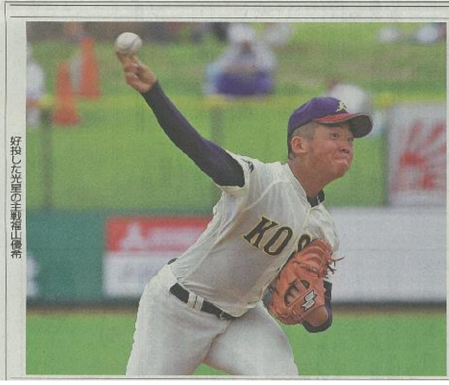
光星は春の県大会準決勝で敗れた聖愛に雪辱を果たした。打線が奮起し、聖愛が送り出した3投手をことごとく攻略。好機を確実にものにする盤石の試合運びでコールド勝ちを収めた。

3安打4打点と小渕智輝弘が存在感を示した。初回は左前打で、次打者小池智也の先制二塁打を呼び込んだ。二回に左中間に2点二塁打を放つと、四回は1死一塁から初球のスライダーを狙い撃ちし、右翼席に運んだ。「感触が良かった」とリードを広げる会心の一打で勝利を手繰り寄せた。

好調には要因がある。事前に聖愛投手陣の特徴をしっかりと把握。狙い球や投手ごとに自身の足の位置を変えるなど打席の中で工夫を凝らした。

リードオフマンの吉田大樹主将は「自分が出塁すれば、必ずかえしてくれるのが小渕や小池」と中軸に絶大な信頼を寄せる。この試合で出塁した2度とも、小渕の一打で本塁を踏んだ。

「次は勝たなきゃいけない」。昨年、2年生ながら夏の甲子園を経験した小渕の意気込みは強い。普段は明るく、ムードメーカー的な役割の3番打者は「一つのミスが命取りになる。大事に戦いたい」と表情を引き締め、勝利への執念を見せた。（向中野一樹）



好投した光星の主戦福山優希

“変則”継投が奏功

〇…光星は、先発の右腕福山優希と左腕成田太一による小刻みな継投で聖愛打線を1点に封じた。

六回途中まで1失点と好投の福山が右翼手へ退くと成田がマウンドへ。七回頭には福山が再びマウンドに上がり、途中からまた成田へスイッチ。

「春の東北大会でもあった継投策」と成田。試合前に仲井宗基監督から起用法が告げられていたという。

この試合でも2人は役割を果たし、しっかりと打者を抑えた。福山は「どんな場面で投げても自分の球を投げるだけ」と変則起用でも動じない。

「次戦も抑えて甲子園に行く」。2年生投手二人は力強く決勝での活躍を誓った。

聖愛・鈴木完汰（五回、バックスクリーンにソロ本塁打）「走者がいなかったので、塁に出るという気持ちで直球を振った。試合の流れを変えると思ったが、そうはいかなかった」

5回聖愛2死、鈴木完汰がバックスクリーンにソロ本塁打を放つ

聖愛 まさかのコールド負け

〇…聖愛はまさかのコールド負けで準決勝敗退。須崎栞太、平山泰我、主将の山口大成の3投手が継投したが、強打の光星打線を抑えることはできなかった。

大振りな印象があったという光星打線への対策として、緩い球や高めの球を織り交ぜた投球で打たせて取ろうとしたが、「春よりもコンパクトなスイングになっていて、うまくかわせなかった」（山口）。

春季県大会準決勝で9―7と競り勝った相手に、夏の舞台で大敗した。それでも「どんな時も笑顔で、はつらつとプレーする」という聖愛野球は最後まで貫いた。山口主将は「後輩たちに今日の教訓を伝えて、来年こそ日本一になってほしい」と思いを託した。

デーリー東北新聞社提供